

認知と非認知の一体化

2025・10・15 重枝 一郎

学習指導要領改訂に伴い、これまでのような教科ごとの学力テストの点数で評価できるものと共に、学びに向かう力や人間性を育むことへも力点が置かれるようになり、「非認知能力」と言われる能力が重要視されるようになった。「非認知能力」はテストで測れない力であるため、「非認知能力」を言語化・可視化し、私たち教師の共通言語やブレない評価軸をもつことは大切になる。

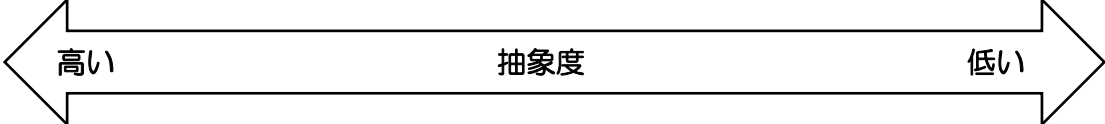
最上位の学校教育目標は「自律的学習者」になる。わかりやすく言うと、「主体的に学び、行動する生徒」ということになる。このような感じで、言葉の抽象度を低くしないと、どんなフレーズも絵に描いた餅になる。例えば、私がよく言う「異質のたし算」では、「たし算はたし算でも、同質より異質の方がたし算は大きい。だから受け入れる力が大切になる。これからの未知の未来での学びや出会いでもとても大切な力となる。受け入れる力は、これからの世の中で活躍できる力になる。また、受け入れる力がある人は、人をいじめたりもしない」のように、言葉の抽象度を低くし、掴み取るマインドをつくっていくことが何においても教育の本質になる。

「非認知能力」は見取るポイントは、生徒が安定してその行動をとることができているかで見取る。その際、注意したいのは、「非認知能力」にはプラス面とマイナス面があるということである。例えば、「他者とつながる力におけるコミュニケーション力」だけだとまだ抽象度が高い。ここを低くした時、「相手と意思疎通を取りやすい発信と受信ができる」というプラス面と「自分と相手の一致感を押し付ける」というマイナス面の違いがあったりする。ここを見取らなくてはならない。

この見取りは、個人のレンズだけだとわからないことがある。よって、見取りのレンズをチームで持つために言語化している学校は多い。これは、小中での話ではなく、高校でもある。高校の先生は、「非認知能力」と「学力向上」との関連をあまり意識していないことが多い。つまり、「認知能力」と「非認知能力」を切り離しているということである。実は、脳には知識をインプットする認知能力の基盤となる部分がある。そこはPCと違って、そこに直接入力することはできない。そのため、感情の動きをする部分への働きかけが必要になる。「非認知能力」への刺激を与えることが、「認知能力」の質を上げることがわかっている。

つまり、授業では「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育てるという意識をはっきりと持たなくてはならない。もちろんこれまで、そのことを無意識的に多くの先生は実践していると思う。ただ、学習指導要領の改訂に伴い、より具体的にしていかなければならないということである。「今、生徒にどんな認知能力を獲得・向上させたいのか、そのためにどんな非認知能力に刺激を与えたいのか（育成したいのか）」といった感じである。

例えば、下表のように可視化したものを、評価者の教師チームはもちろんだが、生徒とも共有するといったやり方が私の実践である。参考にしてほしい。

		
自分と向き合う力	・レジリエンス ・忍耐力 ・自制心	「何がいけなかったのかな」「もう一度やってみよう」「一度落ち着こう」「今やるべきことをやろう」等
自分を高める力	・向上心 ・自信 ・楽観性	「こうしたらもっとよくなるかな」「これをもっと調べてみよう」「まずはやってみよう」「自分の意見を言ってみよう」等
他者とつながる力	・コミュニケーション力 ・共感力 ・協調性	「どうすれば多くの人が納得できるかな」「あの人の考えも聞いてみよう」「その考え方もアリだな」「自分とは違うけど取り入れてみよう」等

このような表を生徒と共有する。教室掲示でもいい、プリントにしてノートに貼らせてもいい。先生たちは授業する際、最初に本時の目標を共有すると思う。それは【ミッションAL①】にも示している。その際、教科の目標と一緒に、「今日は難しい課題なので、向上心でいこう」とか「今日はグループワークなのでコミュニケーション力でいこう」等、授業の目標の板書の横に、並列的に「非認知能力」をワードで示す。もちろん。授業の振り返りは、教科の内容的なものと合わせて振り返るようにする。

授業で「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育てる。

- ※ これまでに「非認知能力」のワードのある「校長研修だより」は、
- 32「避難訓練の先にある学び」
 - 55「職員室の先生方へお願い③目標管理シート」
 - 127「教師が育たない学校は生徒も育たない」
 - 136「細胞の話」
 - 196「人づくり」